

2019 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	王柳蘭(同志社大学グローバル地域文化学部)
研究テーマ	外国人をめぐるリスクとセーフティネット構築に関する学際的研究—防災学と地域研究を繋ぐ

< 助成研究の要旨 >

外国人の流入と定着化がますます進む日本社会において、多文化共生のための政策整備とその実践は喫緊の課題である。その一方で、阪神・淡路大震災や東日本大震災以後、高齢化と人口流出や産業の衰退などが相互に影響しあい、コミュニティの弱体化や災害脆弱性が指摘されてきた。本研究は、こうした状況の中、①海外における多文化状況下における共生の知見を活かし、日本国内における多文化に生きる人々の日常のセーフティネットの仕組みをフィールドワークから実証的に調査し、かつ②非日常や災害リスクに備える外国人を含めたネットワークの仕組みに関して防災研究と共同研究を行い、日常と災害を接続しうる持続可能な多文化コミュニティの構築とその支援について、行政やNPO等実務者との協働を通じて、課題抽出を行うことを目的とした。

調査の結果から、地域コミュニティにおける外国人住民と日本人の繋がりの希薄、縦割り行政におけるリスク関連部局と多文化共生関連部局等の連携不足、外国人に対する情報発信の難しさ(やさしい日本語の実践が防災において、地域レベルではまだ十分に行われていない)といった課題が浮き彫りになった。そういった中、本研究で実践した岐阜県の取り組み(防災リーダー研修や外国人防災リーダー養成講座等)は、行政、NPO、外国人住民、日本人住民の災害と日常をシームレスに繋ぐための試みとして、高く評価される。

今後は、①海外における多文化コミュニティや国内の外国人住民を対象とした調査によって、多元性と異質性を内包した地域の実情を掘り起こし、日本の多文化共生政策の改善に向けた研究成果の還元を積極的に行うこと、②持続可能な多文化・防災セーフティネットの構築にむけて、外国人住民、地域、行政、NPO、大学等を含めた多元的な協働を可能にするための学際研究とアクションリサーチを継続していくことが求められる。そのことによって、多様な外国人や災害脆弱者のおかれた状況と、それぞれの特性を踏まえた、日常—災害を通じた自助・共助の実現にむけた共通の課題を抽出し、政策提言につなげていくことが可能となる。